

95. Dubin-Johnson 症候群 1 家系の 肝スキャン像

東京大学 第2内科

山田 英夫 飯尾 正宏 亀田 治男

〔研究目的〕 演者らは先に ^{131}I BSP (mono) を用いた継時的肝スキャンを体質性過ビリルビン血症の病態解明と診断のために施行した。そこで同じ直接型過ビリルビン血症を示す, Dubin-Johnson 症候群と Rotor 型において, この色素の代謝の明らかな違いを指摘し, 両者の鑑別に有用な手段であることを報告した。また Dubin-Johnson 症候群においては, 他の原因による黄疸と異なり, ^{131}I BSP と ^{131}I RB の間に排泄層の解離現象が見られ, この維持的スキャンは Dubin-Johnson 症候群の診断における新しい criteria である。

今回は同胞に2例の Dubin-Johnson 症候群の発生した1家系のスキャンを行ない, Dubin-Johnson 症候群の解明に努力した。

〔方法〕 家族構成は父母と2女, 2男である。このうち長男と次男に黄疸がある。家族全員について肝機能, BSP 5 mg/kg 負荷により再上昇を観察し, 全員について, ^{131}I BSP による継時的スキャンを行なった。1例の Dubin-Johnson 症候群では, ほかに ^{131}I RB によるスキャンと, ^{131}I BSP (diiodide) によるスキャンをも行なった。

〔結果〕 2人の Dubin-Johnson 症候群においては, BSP の再上昇が見られ, ^{131}I BSP, ^{131}I RB とも先に報告したとき, 典型的な Dubin-Johnson 症候群のパターンを示した。また ^{131}I BSP (diiodide) も著明な排泄遅延を示した。一方家族のうち, 黄疸を伴わない者では, 何れの検査も正常であった。なお興味あることには, 同胞中に極めて類似した肝の形態を示したものがある。

〔結論〕 Dubin-Johnson 症候群の症例では典型的なスキャンパターンを示した。黄疸を伴わないものでは正常であり, この検査においては不顕性の carrier の存在は認められない。

96. ^{131}I -BSP による胆道疾患の鑑別診断

名古屋市立大学 第2内科

植村 邦宏 藤田 卓造

R I 治療研究室

柴田 靖彦

〔目的〕 ^{131}I -BSP は高い肝親和性を有し, 肝の排泄機能と形態を同時に知ることができ, また診断の簡易化に価値を認める。われわれは ^{131}I -BSP を用い胆道疾患の鑑別を試み, 臨床的意義を検討したので報告する。

〔方法〕 診断の確定した入院患者を対象とし, 急性および慢性肝炎, 細胞管性肝炎, 肝硬変症, 閉塞性黄疸の各疾患について検討を加えた。方法としては ^{131}I -BSP 250~350 μCi 静注後5, 10, 15, 30, 45, 60分, 症例により3, 5, 24時間に採血し, 各試料を Well type scintillation counter で10分間測定し血中消失曲線を作成した。また同時に静注後60~90分まで5分間隔で, その後3, 5, 24時間に Scinticamera で経時的に肝腹部の Scintiphoto を取った。

〔結果〕 急性肝炎極期では肝影は15分後でも淡く, 明瞭になる迄にかなりの時間を要した。胆のう出現時間, 腸管排出時間も著明に遅延した。血中消失率も高値を示し, 肝への摂取が著明に障害されている。慢性肝炎では肝機能の状態によりかなり差を認めた。肝機能の良効な患者では健常者と差を認めない症例もあった。肝影は15分後にかなり濃く認め, 胆のう出現時間, 腸管排出時間はかなり巾があるが健常者より遅延する傾向があった。血中消失率は健常者よりやや高値を示した。細胆管性肝炎は急性肝炎極期例とほぼ同じ結果をえた。肝硬変症では15分後の肝影は慢性肝炎より不明瞭なものが多い。明瞭になる迄に長時間を要する症例が多い。胆のう出現時間, 腸管排出時間はあまり差を認めなかった。血中消失率は多数の症例で明らかに高値を示した。閉塞性黄疸は15分後の肝影はすべて不明瞭であり, 明瞭になる迄に長時間を要した。胆のうは全例で出現せず, また腸管排出も5時間迄は全く認めなかった。血中消失率は著明な高値を示し, 24~48時間後でも血中停滞を認めた。